

二葉亭四迷——真理について

博士課程前期一年 武市 憲幸

明治二十年『浮雲 第二編』執筆中の二葉亭が徳富蘇峰に宛てた書簡が残されている。『新日本之青年』で十九世紀の文明を「真理探索的ノ文明」と規定する蘇峰に傾倒した二葉亭ではあるが、この書簡では小説執筆の過程で自己の内部に萌し始めた真理への懷疑を打明けている。真理のためなら命さえ惜しくないとする彼は、一体なにゆえに真理は尊ぶべきなのかという疑問に苛まれていた。文学者としての道を歩み始めた彼が、なぜ真理の一点に拘らざるを得ないのか。当時の彼にとって小説とは、作家が作品で独自の真理を顕現できてこそ小説と呼ぶべきものであった。この意味で『浮雲』が彼の意を満すものであったか否かは、中途で筆が折られてしまうという事情がおのづと物語っている通りである。自己の真理を喪失し懷疑に陥る二葉亭を理解するために、彼が当初意図した形での真理の姿を明らかにする必要がある、その分析を試みた。

彼の真理に関してまず漢学、殊に朱子学に於ける「理」をとりあげた。西欧の文学に接する以前の彼が、精神的感化を受けた漢学に於いて「理」とはどのような性格を持つのか。朱子の『近思録』に語られる「理」とは、人間を含む一切の自然・宇宙の原理であり、同時

にか、あるべき規範・道徳でもある。(丸山眞男氏『日本政治思想史研究』、島田虔次氏『朱子学と陽明学』)更に朱子は万物を貫通するこの「理」は人間に与えられた「性」であることを説く。「性は即ち理なり。天下の理、其の自る所を原ぬるに、未だ不善あらず。」とア・プリオリに善とされる「理」は私欲や情がこれを濁らせると解釈される。人は己れに備わる性(「理」)を完うさせるため、一木一草に及ぶ「理」の一つ一つを明らかにしなければならぬ。具体的には聖賢の書に備わる「理」を学び、自己の一身を修めるのだが、格物→致知→修身→治国→平天下へという順にそれを天下・国家へと広めていく。経国の業たる「治国平天下」は物の「理」を窮める「格物致知」と結び合わされる。以上の漢学的「理」に於いて、それを明らかにすることが士大夫・インテリゲンチヤの務めであり、同時に世の中を治めることになるという認識は二葉亭の真理にも受け継がれていると考えられる。しかし両者をそのままイコールで結ぶことはできない。次にこの漢学の「理」が日本でどの様な過程を経て近代的な「理」へとつながるかを明治初期啓蒙家西周の『百一新論』にみる。

西は漢学に於いて一つに語られる二つの「理」に楔を打込んだ。一方は「天然自然ノ理」「物理」つまり自然科学的な法則であり、一方は「人間上バカリニ行ナハレル理」「心理」である。前者は人間の力の及ばぬ「先天ノ理」であるのに対し後者は人間の内にのみ存する「後天ノ理」である。ここで漢学に於いて人間の「心理」と一体になった自然の原理は分離された。つまり自然現象に天の意を讀もうとする様な漢学の虚妄は合理的思考により打ち破られたことを意味する。だが西の「理」で特長的なのは「物理」から引き離さ

れた人間の「理」「心理」もその由来が先後の違があるにせよ、「物理」と同一の「天」に求められている点である。一見変更可能な「心理」も「物理」と同根である以上それは、「積メバ同ジ」と強調される。彼は自然界の法則の様に人間各自の心にも一定の「理」の存在をみている。

西の「心理」の持つこの合理的側面は二葉亭の真理にも指摘することができる。北岡誠司氏は二葉亭がペリンスキの文学理論を理解する際「神の絶対的イデー」を意識的に「真理」の語に置き換えていることを指摘されている。ペリンスキは現象の背後に秘む「意」に神の意志をみるのだが、二葉亭にとって「意」とは雑多な現象を抽象することにより得られる自然の法則の様にあくまで合理的なものであった。「小説総論」で「意」は、変更極まりない「形」――現象の背後にあって「万古易ら」ない普遍性が強調されている。

以上の様に二葉亭の真理は、漢学の「理」と同様それを明らかにする行為は経世の業につながるものであり、小説執筆は決して瑣事ではあり得なかった。またそれは西の「心理」の合理性を備えたものである。これが実際の『浮雲』でどのように彼の意図を裏切っているかの点は、今回の発表で触れることはできなかったが、前述の合理的側面がその一つの因となっていることを指摘しておく。西に代表される啓蒙家達の獲得した合理性が日本の近代を大きく押し進めたことは否定できない。人々は封建制度を支える「理」や非合理的な迷妄から解放された。但し西が自然と同根の「理」で人間の心を解釈した時に二葉亭の真理に対する懐疑に至る道が用意されたのではなからうか。なぜなら「ニンが四」では決して解釈できない心の領域へ彼は足を踏み入れていたからである。